

学会報告

TEA研究会

樋口 倫生

TEA研究会春季大会は、2006年3月29日（水）に明治大学で開催された。TEA研究会については、今大会までの幹事であった伊藤順一氏（当研究所）が先号で詳細に説明しているので*、ここでは若干敷衍すべき点を述べておきたい。

TEA研究会の目的が、「農業の理論経済的研究を推進するために、会員の相互連絡を図る」となっていることから想像できるように、大会での報告・質疑応答時には、経済学の教科書に書かれている内容は、当然の前提知識である。たとえばその中には、経済学徒には常識であるが、一般人にはなじみの薄い機会費用というものがある。機会費用とは、あるものを得るために犠牲にしなければならない費用であり、この概念を応用した比較優位の理論は、輸出を行う時に、その機会費用が最も小さな部門に特化するのが効率的であることを含意している。テレビ討論をみると、経済学者とこの概念を知らない評論家との間で全くかみ合わない議論をしていることがあり、生産的な場にするためにも、せめてスティグリッツの『入門経済学』くらいは読んでおいてもらいたいと思うことがしばしばある。

話が少し逸れたが、ここで報告内容について、小職の印象に残ったものに限って紹介していこう。まず一つは、伊藤氏のCollective Action for Local Commons Management: Hypotheses from Evolutionary Game Theory and Empirical Evidenceである。灌漑管理のための集合的行動に関する仮説を提示し、中国雲南省のデータを利用して経験的に仮説の検証を行う内容となっている。地域共有地管理の理論と進化論的ゲーム論をもとにモデルがつくられており、計量分析の結

果、集合的行動は、非農業就業機会が少なく、農民間の所得格差が非常に小さく、灌漑ゲームが様々な社会的交換ゲームと関連がある農村コミュニティで促進されることが示されている。先行研究が膨大な数におよぶ共有地問題に対し、進化論的ゲーム論を援用したモデルを駆使して、見事にその本質に迫っており、一流英文雑誌への掲載が待たれる。

次に、新たにTEA研究会幹事に選ばれた櫻井武司氏（当研究所）のPlot-Specific Rainfall Risk and Farm Households' Risk Management in Mali, West Africaである。「農家は空間的な降水量の分布を認識している」、「圃場特定の降水量は、農家に対し特別なショックを与える」という仮説の検証を通じて、降水量の変動が農家行動に与える影響——事前のリスク管理と事後のリスク処理——を詳らかにしている。西アフリカのデータによる仮説検定では、圃場レベルでの降水量の変動は大きく、各農家はその変動を認識し、かつそのリスクに備えて行動することが示されている。櫻井氏は、西アフリカの研究で2006年度農業経済学会誌賞を受賞されており、今回の報告も、アフリカを主フィールドとする開発経済学者櫻井武司の面目躍如たるものであった。

その他にも忘れてならないのが、本研究所に非常勤としてこられている高橋大輔氏（東京大学）による「戦後日本農業における過剰就業の動学的調整過程」である。過剰就業に対する従来の解釈に再吟味のメスを入れる誠に興味深い内容の報告であった。

なお小職は、10年ほど前に京都大学で大会があった際に、初めて報告をさせてもらっている（その時に伊藤、櫻井両氏に初めてお会いした）。会場でどのような指摘を受けたか全く思い出せないが、懇親会で冷たいビールが緊張で渴いたのどを潤してくれたことだけはいまでも鮮明に覚えている。

* 伊藤順一（2006）「学会報告」『農林水産政策研究所レビュー』No.19, 43～44ページ。